



傷だらけの研究人生

●
正田晋一郎 Shin-ichiro SHODA

東北大学大学院工学研究科 教授・日本化学会東北支部長



学問の方向性や展望，教育，安全，倫理，男女共同参画，グローバル化，人工知能，エネルギー環境問題の現状に対する意見は十人十色であろう。ましてそこへ時間軸が加われれば議論はより複雑になる。巻頭言執筆の依頼を受け，さてどうしたものか？ 誰もが意見を同じくする事柄はないものかと考えたあげく行きついたのがこの題目である。40年以上も前のことだが，私が高校生のとき，映画界の大スターが突然歌手デビューをした。

古い奴だと思いでしょが，古い奴こそ
新しいものを欲しがるもんでございます。今の世の中，
右も左も真っ暗闇じゃござんせんか——

厭世的な内容が好きになれず，片方の耳に手を当てながらの歌声に，思わず両耳を塞いだものだ。ところが定年も近い年齢になると，これが妙にしっくりくるのである。研究者の一生は闇の中を手探りで歩くようなもの。失敗するたびに傷つき，だからいつも傷だらけである。それでも生きていけるのは，再生の仕組みを備えているからだ。

科学の発展は失敗なくしては語れない。多くの挫折の中から新しい発想が生まれる。また，時代や世代を超えた骨太さも大事である。私が専門とする糖科学の分野でも，長い間生き残っているすごい研究がある。1970年代，日本人化学者によって見いだされた糖鎖の還元末端を蛍光基で標識する方法である。今では世界中の研究者の間で繁用され，あたかも空気のような存在で，開発にいたる歴史に思いを馳せる人は少ない。話は少し変わるが，歴史を知り，その時代の背景となる哲学に触れることは大切だ。〇〇史であるとか〇〇哲学は，最先端研究に役立たないのであろうか？ とんでもない。その逆である。

暗闇にピカッと光る研究は，目前にある大きなものさえ見えない状況から生まれる。それは，解釈こそ違おうが，太宰治の「富嶽百景」に登場する月見草や，林芙美子が「放浪記」で描いた，極貧の中にもあっけらかんとしたヒロインの姿のイメージと重なる。完全な暗闇に，1個でも光子（ミツコではなくコウシと読まれたし）があれば明るく，まさにこれが独創の生まれる瞬間そして波及が始まる瞬間である。

4月になれば，多くの研究者・技術者が，希望に満ち溢れ，新しい環境で仕事につくことだろう。しかし傷だらけの研究人生はどこまでも続くのである。“研究を楽しむ”という言葉は誤解を招きやすい。どん底のレベルを基準に考える方がよいのである。日本化学会は，慰め合いではなく，励まし合いの場を確実に提供してくれる。会員であることのメリット・デメリットを云々してはいけない。世界をリードする学会に身を置いているという事実，そのこと自体に大きな意味があり，何にもまして大切なのである。

ほっと息をつきラップトップを閉じると，明るい日差しが差し込んできた。しかし，心の中には不気味な暗雲が漂い始めている。

© 2017 The Chemical Society of Japan